

文理融合型の指導的人材育成プログラム

研究者 東京工業大学大学院社会理工学研究科教授 橋 爪 大三郎

〔研究の概要〕

わが国の従来型の指導的人材の問題点は、法律経済系、文学系、理工学系の人材がそれぞれ別途に養成されるのみで、それらの幅広いバックグラウンドをあわせもつ人材が育成されなかったことである。このような文理分離型の人材育成は、実社会が文理の人材を効果的な協働関係に配置することを想定しているが、実際にはうまく行かず、戦前の軍部の暴走や、近年のバブルと経済停滞を招いてしまった。

本研究は、理工系／文系出身の学生がほぼ半々ずつ集まる東京工業大学大学院の価値システム専攻を舞台に、将来高度な意思決定にたずさわる指導的な人材を育成するための、実践的な教育プログラムを研究開発することを目的としている。言説編成、文系発展演習、公開講座などのかたちで、プログラムのプロトタイプを開発することができた。

〔研究経過および成果〕

1. はじめに

文理融合型の指導的人材を育成する方法は、これまで大別して、2つの方法がある。ひとつは、フランスのエコール・ポリテクニクのように、理工系科目（数学や物理）を入学試験に課し、主として理工系の素養をもつ人材を採用したうえで、文系科目（経済、法律、哲学、歴史）を必修として身につけさせる。もうひとつは中国共産党のように、理工系の出身者を現場に配置したうえで、経営管理や政治経済の業務を担当させ、有能な人材を抜擢して中央の指導部を構成する。文系の人間にあとから理工系の素養を身につけさせるのは困難なので、この2つが現実的な方法だった。

けれども、この方法は、ごく一部の理工系出身者にしか適用できないうえに、コストもかかる。現実には、理工系の素養のない文系出身者が指導的立場に立ち、むずかしい意思決定を迫られるというケースが続出する。もっと手軽に履修できる文理融合型の訓練システムが必要である。

この研究は、文系／理工系の出身者が半々ずつ集まる修士課程である東京工業大学社会理工学研究科を舞台に、簡便に実施できて効果の高い「文理融合型の指導的人材育成プログラム」のプロトタイプを開発しようとするものである。

2. 「言説編成」における実践

「言説編成 discourse formation」は、価値システム修士課程の選択科目のひとつで、公衆に理解可

能なかたちの言語表現を用いて意思決定を行なう「合意形成技術」を修得課題とする演習形式の講義である。この枠を用いて、約20人の学生を対象に、以下のプログラムを実施した。

1) 月刊総合誌を用いた政策的意思決定のシミュレーション

最初の課題としては、住基ネットの導入を機会に総合雑誌に掲載された論文13編を配布し通読させ、それをもとに、グループに別れて最適な政策を形成させ、合意形成のためのポリシーペーパーを作成させた。つぎに、相互に討論を行ない、説明責任や批判的ジャーナリズムの必要性について体得させた。第二の課題としては、アメリカのイラク攻撃の接近を機会に総合雑誌に掲載された論文15本を配布し通読させ、同じく適切な政策形成と討論を行なわせた。

2) 危機管理を想定したシミュレーション

第二の課題は、某国危機を題材にした。関連文献や資料で某国をめぐる情勢を学習したあと、ゲーム理論（チキンゲーム）を用いてありうべき危機の数理的な理解を試みた。これを踏まえ、東京湾に核爆弾を設置したと某国から通告があったとの想定で、危機的状況下における意思決定を行なわせ、そののち討論を行なって、意思決定の可否を批判的に検討した。

これらの課題を通じて、文系／理工系出身者の適切な協働関係が育っていくことが観察されたほ

か、事後のレポートでも、テクニカルな知識と問題解決の前提となる価値観とが別々の要因として政策課題解決のなかで意識され、総合的に解決されたという感想が寄せられた。

3. 「文系発展演習」における実践

文系発展演習は、学部3、4生を対象に、文系の進んだ演習プログラムを提供する、文理融合型の授業である。ここでは文系の古典（たとえばルソー）、時事的評論（たとえば『チャイナクライシス』）など十数冊の文献をとりあげ、読書課題としたあと、自由討論のかたちで能力の開発をはかった。合宿班は、代々木のオリンピック記念青少年センターで集中的な討論を行なった。評価シートやレポートから、このプログラムが有効な効果をもつことが確認できた。

4. 「公開講座」における実践

東京工業大学は平成14年10月から、朝日カルチャーセンターと提携して、公開講座を開発・提供することになった。私はその責任者となったので、これらの講座を学部・大学院の学生に開放し、教育の一環とすることを考え、実施した。具体的には「吉本隆明をめぐるシンポジウム」「江藤淳をめぐるシンポジウム」「価値判断と21世紀ビジョン」「＜若者論＞の現在」「北朝鮮徹底分析」「インターネット社会の行方」の講座・シンポジウムを現在までに公開した。講師は、加藤典洋、竹田青嗣、大澤真幸、福田和也、佐高信、東浩紀、上田紀行といったそうそうたる顔ぶれである。学生は、割引入場券を購入して入場することができ、レポートを提出すれば、正規の授業の一環として認定される。学生の反応はきわめて良好で、これまでにのべ200人の学生が参加し、レポートを提出するなどしている。

このように、少なからぬ理工系の学生が文系のバックグラウンドを身につけようという強い意欲をもっており、適切な機会が与えられれば、積極的に参加して融合型のプログラムに参加するということが実証された。

5. 「中国短期留学」における実践

学部生向け総合科目のひとつとして、文理融合型プログラムとしての短期留学を実施した。参加を希望した36名の学生が、私の引率のもと、9月5日～25日のあいだ、中国の天津社会科学院に滞在して、中国の政治・経済・社会・文化といった文系の授業、工場や研究所の見学、中国人学生との

交流といったプログラムに参加した。

このプログラムは、広い視野をもった国際的リーダーを育てることを目的に実施したもので、その詳細が学生の手によりHPに掲げられているように、大きな成果をあげることができた。

6. まとめと今後の課題

以上によって、理工系出身の学生や、文系／理工系出身の混合する学生に対して、より高度な意思決定のための基礎となる訓練をほどこすプログラムを、実践することができた。

今後の課題としては、このつぎの段階に位置する、指導的人材としての高度な意思決定そのものを訓練するプログラムを開発することである。

今回の研究を踏まえて、来年度、大学院価値システム専攻の「価値システム応用」の講義において、そのプログラムを実践する予定である。具体的には、日本の戦後外交を素材に、具体的なさまざまな状況において、1) 国益からみてより望ましい政策選択、2) 道義からみてより正しい政策選択、を比較検討させ、最終的にどのような政策選択を行なうかを実習する、実践型の教育プログラムである。その基礎に、ゲーム理論そのほかの理工系アプローチも活かされるであろう。